

戸津井鍾乳洞

狭い道を通って戸津井鍾乳洞に入っていくと、さまざまな形、大きさの鍾乳石や石筍のある室につながっている。この鍾乳洞は2億5000万年以上前にできたもので、天井、地面、壁面から伸びているカルサイト（方解石）形成は、進行中の浸食、集積した鉱床の結果できたものといえる。

20世紀始めにおける石灰岩の採石のときに丘の中腹に掘り下げた坑道が鍾乳洞の入り口になっている。その当時、採石した石灰岩は、建築や肥料生産に使用されていた。しかし、戸津井での採石は、戸津井鍾乳洞とその形成が発見されると終わりを告げた。

洞窟の全長にわたる100メートルの道では頭をかがめ前かがみにならなければ通れないほどの狭い空間に通り抜ける。メインとなる室や注目すべき特徴の名称は、想起されるイメージを反映したものとなっている。「カニのトンネル（the Crab Tunnel）」では、来訪者はしゃがみ、「つり天井室（the Needle Ceiling Chamber）」に向かい横向きに徐々に進まなければならない。また、六方ディンプルパターンを持つ壁面の部分、「ハチの巣岩（Bee's Nest Rock）」もある。

カルサイト（方解石）形成はほぼ白色でわずかに色づいている。通常はオレンジ色、赤色、黒色をしている。明かりがカルサイト（方解石）形成を照らし出し、その細部や彩色を強調する。地質学者らは地表植生や土壌のミネラルや時には酸により色が決まると考えている。

戸津井鍾乳洞は、基本的に、週末、祝祭日、夏季のピーク時その他の午前9時から午後5時まで開放されている。現地までの公共交通機関はなく、アクセス道は非常に狭くなっている。